

Dubliners の女性 : 抑圧と解放

田中, 恵理
九州大学人文科学府

<https://doi.org/10.15017/24556>

出版情報 : 九大英文学. 53, pp.23-35, 2011-03-31. 九州大学大学院英語学・英文学研究会
バージョン :
権利関係 :

Dubliners の女性

—抑圧と解放—

田中 恵理

James Joyce の初期作品 *Dubliners* (1914) は、アイルランドの首都ダブリンを舞台とする人々の生活を描いた 15 篇からなる短篇集である。短篇という体裁上、物語同士を連結する人物や筋はないが、随所に抑圧された女性の姿が鮮明に描かれている。このことから、性の問題が相互を結ぶ重要なテーマと考えることができる。そこで本稿では、短篇集 *Dubliners* を対象として女性排除の仕組みを明らかにし、その上で、“The Dead”に登場する Gretta を分析しながら女性解放への道筋を探ってゆきたい。

Dubliners における女性排除については、Suzette A. Henke がフェミニズムの視点から“Women and children have been relegated to the margins of discourse in a culture that is male-centered and woman-avoidant” (12) と述べているように、批評家たちからも多く論じられている。実際、ほとんどの物語で女性排除が窺える。例えば、“The Sisters”や“An Encounter”、“Araby”では主人公の少年の母親は登場しないが、これは、物語からの母性の排除を示す。“A Little Cloud”と“Counterparts”の妻は、不在であったり夫の視点からのみ描かれていたりし、また、“After the Race”、“Ivy Day in the Committee Room”、“Grace”の男性間での自動車競走や政治・宗教談話に女性は参加しない。“A Painful Case”の女性も主人公の男性から拒絶され、その上、最後に事故で命を落とすというプロ

ットにより、彼女の存在は物語から抹消されてしまっている。さらに女性は性欲発散の対象にもなるが、その様子は“An Encounter”や“Two Gallants”、“The Dead”に描かれている。一方女性が主人公の“Eveline”、“Clay”、“The Boarding House”、“A Mother”でも、前者二作品では囚われた活気のない娘と老婆が示され、後者二作品では欲や権力を誇示する女主人たちが軽蔑の対象とされる。

以上のように女性差別が鮮明に描かれているが、こうした女性の置かれた状況の単なる列挙ではなく、女性差別を生み出す仕組みについての包括的な考察が本稿の狙いである。考察を進めるにあたっては、作品が描くアイルランド特有の社会的・文化的背景と男性の思想体系の解明が必要と考えられる。なぜなら、女性差別が各文化、各地域固有の社会事情や文化形態と、神聖さと俗悪さの両極で捉えるような男性による女性認識によって生じるという特性があるからである。それでは、まず、*Dubliners* に描かれているアイルランド固有の社会的・文化的背景が女性排除を生み出す仕組みから考察を行う。

Dubliners が描写するアイルランド特有の背景とは、一つには 800 年にもわたるイギリスによる植民地支配、二つ目には国民の大多数が信者であるカトリック教会、そして三つ目には劣悪な結婚事情であり、これら三つの特徴的な背景が契機となって、女性排除が生み出されると考えられる。

まず、イギリスによる植民地支配が女性の抑圧を引き起こす過程についてだが、長きにわたるイギリス支配の下、人々は様々な鬱屈やくすぶった感情を抱き続け、こうした感情は弱者によるさらに弱いものへの支配と抑圧を生み出し、男性はその矛先を女性に向けたといえる。その様子は、植民地支配の問題を取り上げている、“Two Gallants”、“A Little Cloud”、“Counterparts”に描かれる。“Two Gallants”は、仕事にあづけた二人の男、Corley と Lenehan が、女中を騙して金をかすめとる話だが、女はアイルランドの象徴であるハーブに、ハーブ弾きはイギリスになぞらえられ、A. Walton Litz が “Like the harp, the servant girl must submit to the ‘eyes of strangers’ and obey ‘her master’s

hands.”(333)と述べるように、女中は、イギリス支配の経済的な弾圧により職業難に陥った男たちの策略に嵌められる犠牲者なのである。こうした欲求不満の発散がさらに家庭内で行われることが、“A Little Cloud”の Chandler と“Counterparts”の Farrington から窺える。Chandler は、イギリスで成功した友人の Gallaher に劣等感を感じ、“unfortunate timidity”(76)を悔い、“manhood”(76)を主張したい気持ちに駆られ、一方 Farrington も北アイルランド出身の上司に叱責され、パブではイギリス人の芸人に腕相撲で負け強い男という評判を失い、悔しさを抱きながら帰宅する。こうした、イギリス人から受ける抑圧感や劣等感を、子供を叱るという家庭での家父長的支配力の行使によって晴らす。ただ、妻に対しては、二人とも一見弱腰な態度を見せるが、Chandler は、社会的な敗北の原因を無理やり妻や結婚生活のせいにし、Farrington も酒が入ると妻に対し威圧的になっていることから、妻への抑圧も窺える。特に Farrington は最後の場面で、“You let the fire out!”(94)と、火が消えたことに激怒するが、*Dictionary of Symbols and Imagery* に、「火焰の形象と熱は男性の象徴」(Vries 187)とあるように、台所の火の消化から、男性性の否定や家庭内での父権の無力化が連想され、Farrington の怒りと焦燥、家父長権への固執が読み取れる。

このように人々の生活や精神にまで及ぶイギリス植民地支配は、女性搾取や家父長的権力行使という女性が抑圧される状況を生み出しているのである。

次に、カトリック教会の女性排除への関りについてだが、キリスト教がアイルランドに5世紀初頭から中ごろ、聖パトリックによりもたらされて以降、カトリック教会は絶大な力を有していた。その権力維持に貢献したのが、「教皇の不可謬性」という教義で、この考えが権威主義を生み出し、さらには家庭へと伝播して父権制を育んだといえる。西洋家父長制について、Mary Daly は、神=父を掲げる父権一神教がその原点だと主張する。¹つまり、支配し、服従を強要し、従わないものには罪を与える父なる神は、女性を支配する男性のモデルとしてみなされ、家父長制も正当化されるということである。また、カトリックは、プロテスタントに比べマリア信仰が強く、女性たちは処女性を守るようにと厳しく教えられる。その上女性は、マリアと対極のイヴの娘として、男性を墮落へと導く存在と信じられているため、男性の徳を維

持ち高めるために、性の統制は強化され、女性蔑視の傾向は強まると考えられる。男性を誘惑する悪しき女は、“The Boarding House”の Polly に描かれている。Polly は、性的魅力によって Bob Doran を誘惑するが、Mr. Doran は一線を越えたことを後悔し、彼女の振る舞いを責めるような考え方をする。そして告解の席で神父から“sin”（60）を犯したと責められ、償いのようにしぶしぶ結婚に同意するのである。

キリスト教による女性排除の関りについて、アイルランドではさらに、布教の際意図的に加えられたケルト社会の原始的な母権制への圧力も特徴の一つといえる。ケルト社会では、相対的に女性の社会的地位は高かったことが、ケルト神話²や Peter Berresford Ellis³等によるアイルランド女性研究で伝えられている。女性が主権を握るケルト社会の制度や価値観は、その後到来したキリスト教会の父権制の徹底には不都合なものであったため、圧力がかけられたのである。こうした「母権制」から「父権制」の転換に伴うケルト女性への統制が、アイルランドの根深い女性支配の特徴的な要因といえるが、ケルトの強い女性像と母権への抑圧は“A Mother”の Mrs. Kearney に見られる。

表題の“A Mother”が母権制を暗示するかのように、Mrs. Kearney の存在感は際立っている。彼女のそうした姿を、批評家たちは“social-climbing harridan”等と呼ぶが(Miller 351) 娘が出席する音楽会で契約遂行に奮闘する姿には、他の女性キャラクターにない力強さが窺える。こういった彼女の特質を評価した Jane E. Miller は、次のように述べる。

Mrs. Kearney is an interesting figure, not as a “type” of woman, but as one who, neither responsible for nor defeated by the circumstances of her life, tries vigorously to move and change with the times; she is active and practical in a way that few other characters in *Dubliners* are.
(355)

Miller が指摘するように、ステレオタイプの女性像に反抗し活気に満ちた Mrs. Kearney は、まるでケルト女性の再来を示すかのようである。実際、“A Mother”は、William Butler Yeats の劇 *Cathleen ni Houlihan* (1902) を風刺した

作品と言われ、物語の背景には、アイルランド民族運動があり、Mrs. Kearney も娘“Kathleen”の名前を利用して自分の権力を主張している。しかし彼女の主張は、音楽協会の男性たちにより、“the Committee”の決定を盾にして取り下げられる。彼女の力が全能の神のような“the Committee”により制御されたということになる。この抽象的な力を有し目に見えない“the Committee”は、Miller が“Representative of male control, male solidarity, and male superiority, the institution of the Committee is exploited to the fullest by the men” (362) と述べるように、男性性の代表であるが、ここから父権による母権への抑圧が示唆されているといえる。こうして、強いケルト女性のような Mrs. Kearney は、男性的な圧力に統制され、最後はカトリック女性の美徳、“decency” (147) を持つべきと非難されてしまう。このようなケルト的母権制の圧制は、カトリック教会の父権制と聖母マリアの処女信仰とともに女性を抑圧する仕組みを構築するのである。

最後にアイルランドの結婚事情と女性排除の関係についてだが、物語が描く 19 世紀から 20 世紀、アイルランドの結婚率は極めて低かったことが、John A. O'Brien のデータに残されている。⁴それは、1845 年のジャガイモ飢饉を契機とした人口の減少や、敬虔な男性カトリック信者の独身主義、また、貧しい家庭が多いアイルランドの女性には負担がきつい持参金つき結婚制度等が背景にある。一方既婚女性も厳しい家事労働と子育てに追われ、夫の暴力にも晒されていた。そうした劣悪な結婚事情が、女性の立場をさらに悪化させたといえる。そうした状況を反映した *Dubliners* では、登場人物の多くが未婚で、特に女性は結婚事情の犠牲者として描かれる。未婚の老女、“The Sisters”の Nannie と“The Dead”の Julia は、耄碌した惨めな姿で、“Clay”の Maria は魔女のように描写されている。また、“The Boarding House”の母娘は、社会的体面や経済的安定のため結婚に縋るが、上手く結婚へとこぎつけたため、独身男性の自由を奪う策士としても捉えられている。一方“Eveline”の主人公 Eveline とその母親は家庭に縛られる存在として描かれている。犠牲を強いられて悲惨な死を遂げた母親のようににはなるまいと、Eveline は、父親の暴力や職場の嫌がらせなどの “a hard life”(31) がある家からの脱出と結婚を決意する。しかし結局、母親と同様、家庭の囚人へと舞い戻るのが、その理由を

最後の場面から考えることができる。

-Come!

All the seas of the world tumbled about her heart. He was drawing her into them: he would drown her. She gripped with both hands at the iron railing.

-Come!

No! No! No! It was impossible. Her hands clutched the iron in frenzy. Amid the seas she sent a cry of anguish!

-Eveline! Evvy!

He rushed beyond the barrier and called to her to follow. He was shouted at to go on but he still called to her. She set her white face to him, passive, like a helpless animal. Her eyes gave him no sign of love or farewell or recognition. (34)

婚約者 Frank から溺れさせられるような感覚に陥り、急に「無力な動物」のように立ちつくす様子から、Eveline は、母親の姿に自らを重ね、男性の権力に従属的な“Poppens” (32) のような未来の自分を無意識にも予見したのではないだろうか。しかし、未来の家の犠牲から逃れたとはいえ、再び現在の家に縛られている。「家」に関連する言葉が Eveline の意識の中で何度も繰り返されているように、彼女もまた結婚に翻弄されながら皮肉にも家に閉じ込められる犠牲者なのである。

このように、劣悪な結婚事情は、行き後れた未婚女性への偏見や、結婚に縋る女性への蔑みを生み出し、さらに結婚後の女性に対する奴隷的扱いを正当化したのである。

以上のことから、*Dubliners* に描かれている女性排除は、アイルランド特有の背景である、イギリス植民地支配とカトリック教会、そして劣悪な結婚事情という社会文化構造の多角的な要因によって生み出されたということが明らかになったのだが、どの場合も共通して家父長制という男性中心体制が組み込まれていることが分かる。それらの社会的・文化的背景があいまって女

性の従属を強いる家父長制が正当化され、より強固で複雑な女性排除の仕組みが形成されたといえる。

それでは、次節において *Dubliners* における男性の女性描写に注目しながら、男性の思想体系が女性排除を生み出す仕組みについて考察する。

Dubliners の男性は、女性を「聖」と「俗」の二項対立で捉えるという特徴がある。例えば、“Two Gallants”では、Lenehan が聖母マリアを連想させる青と白の服装の女中を見て活気付く一方で、その服装の乱れた様子や彼女の太った体型を満足そうに眺めている。また、“Araby”では、少年によって Mangan の姉が「聖」「俗」二面のイメージで鮮明に捉えられている。まず最初に、“her figure defined by the light from the half-opened door” (22) と、少年には彼女が光輪を伴う聖母マリアのような神聖なものとして映り、さらに少年は、“I imagined that I bore my chalice safely through a throng of foes. . . . My eyes were often full of tears (I could not tell why) and at times a flood from my heart seemed to pour itself out into my bosom” (23) と、聖杯となった彼女の姿を想像し、その聖杯を大事そうに抱えて敵の中を運んでいる騎士のような自分の姿を恍惚と思い描く。

こうした盲目的な崇拜は、亡き司祭の家で絶頂に達し、少年は彼女への愛を誓う。しかしその後少年は、彼女から声をかけられたことで、肉体を伴った現実の女として意識し始める。

The light from the lamp opposite our door caught the white curve of her neck, lit up her hair that rested there and, falling, lit up the hand upon the railing. It fell over one side of her dress and caught the white border of a petticoat, just visible as she stood at ease. (24)

最初に彼女を見た時と同様、後方からの光で少年は彼女の姿を捉えているが、今度ははっきり肉体や髪の色、服装を知覚している。特にペチコートが見え

る点は、Harry Stone が Yeats の *The Celtic Twilight* (1893) の中の“*Our Lady of the Hills*”を援用して、神聖さの否定を主張している。⁵そしてその日以来少年は、肉体を備えた彼女の姿を想像し、欲情にかられたように想いを募らせていく。

こうした二項対立的認識は、女性排除を生み出すと考えられる。なぜなら、「聖」と「俗」に自由に姿が変化する女性は、どっちつかずで中途半端な存在であり、これは、Julia Kristeva の重要概念の一つである、排除すべき「アブジェクト」として考えることが出来るからである。「アブジェクト」とは、Kristeva の著書 *Powers of Horror: An Essay on Abjection* によると、「同一性、体系、秩序をかく乱し、境界や場所や規範を尊重しないもの、つまり、どっちつかず、両義的なもの、混ぜ合わせ」(4) であるが、⁶ このような「アブジェクト」に対するイメージには、魅惑と嫌悪というアンビヴァレントな感情が伴っている。男性を魅惑し嫌悪を誘発する「アブジェクト」としての女性は、父権の秩序や法を乱す最大の脅威であり、全力で阻止しなければならない存在とされる。そこで、この「おぞましき」「アブジェクト」を排除しようと宗教・文化儀礼など様々な浄化が試みられるが、キリスト教のカタルシスの中では、「アブジェクト」な女性は聖母像として昇華される。その一方で聖母マリアは、処女にして母親であるという、精神と肉体の純潔を保つのにに対し、その他の女性は、性的で淫乱な側面も有するため、俗物としても認識されてしまう。つまり、「聖」と「俗」が混在する女性の脅威を排除する過程において、再び女性を神聖視し、また同時に俗物として蔑むという、この循環的な「聖」「俗」の二項対立的認識が、「アブジェクト」な女性の排除に際限なく繋がっているのである。

こうした排除行為が“A Painful Case”の Mr. James Duffy の Mrs. Sinico への対応に見られる。Mrs. Sinico は、妻かつ母という「俗」的側面と Mr. Duffy の告解聴聞者のような「聖」的側面を併せ持つ「アブジェクト」で、この様な彼女を Mr. Duffy は、精神的な繋がりを通して神聖化を試みる。

Her companionship was like a warm soil about an exotic. Many times she allowed the dark to fall upon them, refraining from lighting the

lamp. The dark discreet room, their isolation, the music that still vibrated in their ears united them. This union exalted him, wore away the rough edges of his character, emotionalised his mental life. Sometimes he caught himself listening to the sound of his own voice. He thought that in her eyes he would ascend to an angelical stature; . . .
(107)

肉体関係のない Mrs. Sinico と結ばれた感覚を得ているのは、Mr. Duffy が彼女を精神と肉体の純潔を守る聖なる存在として認識しているからである。ところが、彼女が手を握ろうとした時、そこに俗的側面を見てしまい、嫌悪感を抱き拒絶する。4年後さらに、彼女の死を“vulgar death”（111）だと悪態をつく様子からも、Mr. Duffy は、「聖」と「俗」を併せ持つ Mrs. Sinico を浄化する過程で神聖化を試み、一方で卑猥で低俗な存在として排除しているのである。

以上の考察から明らかになったことは、*Dubliners* に描かれる女性排除は、アイルランドに特徴的な社会的・文化的背景のもと正当化された家父長制と、女性を「聖」「俗」を有する「オブジェクト」と見る男性の思想体系により生み出されたということである。しかし、こうした女性の抑圧を Joyce は単に描写したのではなく、「性」というテーマでつながった作品の中で女性解放への道筋を模索したのではないだろうか。なぜなら、巻末を飾る“The Dead”の Gretta に男性支配による抑圧からの解放が見られるからである。“The Dead”では、老齡の Morkan 姉妹の家で開催されるパーティとその後の Gabriel と妻の様子が描かれているが、二人の間にも、家父長制と「聖」「俗」の二元的把握に沿った、支配・被支配関係が見られる。まず、物語は Gabriel の視点で描かれ、妻 Gretta は語り手や他の登場人物から“his wife”と呼ばれることが多く、Gabriel の夫としての権力が強調される。さらに、Gabriel は、妻の考えや感情が全て分かるという恣意的な家父長制的感覚を持つ。また、Gabriel による、

Gretta の「聖」「俗」認識は、Gretta が遠くの音楽を聴く階段の場面に境にそれぞれ示されている。Gabriel は初め、青色の帽子を被り崇高な佇まいで聖母マリアのような Gretta の姿を“symbol”（211）と形容し、その後は彼女を性的欲望の発散対象として見ている。このように、Gabriel は、家父長的権力で「聖」と「俗」の「オブジェクト」な彼女を性的に支配したいという欲望を高めていく。ホテルの部屋に入り、欲望を発散させようとした時、妻のよそよそしい態度に若干戸惑うが、いっそう暴力的に Gretta を支配したいと思う。その様子は、次の引用に描かれている。

He was trembling now with annoyance. Why did she seem so abstracted? He did not know how he could begin. Was she annoyed, too, about something? If she would only turn to him or come to him of her own accord! To take her as she was would be brutal. No, he must see some ardour in her eyes first. He longed to be master of her strange mood. . . . He longed to cry to her from his soul, to crush her body against his, to overmaster her. (218)

そして Gretta の突然のキスで彼は自信を取り戻し、ますます妻の考えを恣意的に解釈し、従順だと決め付ける。その傲慢さは、“Perhaps her thoughts had been running with his. Perhaps she had felt the impetuous desire that was in him and then the yielding mood had come upon her”（219）という描写にも示される。しかし次の瞬間、こうした Gabriel の Gretta に対する恣意的な解釈と、暴力的な性支配から、Gretta は抜け出す。それは、“his wife”として、ほとんど言葉を発さなかった Gretta が、主体的に内に秘めた世界を語ることによって成し遂げられる。Gretta の語ったことは、彼女のために命を落とした昔の恋人との思い出であり、Gabriel は、自分の知らない妻の過去を目の当たりにしたことで、妻のことは全て知っているという幻想を失い、“It hardly pained him now to think how poor a part he, her husband, had played in her life. He watched her while she slept as though he and she had never lived together as man and wife”（223）と、夫としての自信も喪失してしまう。

夫と妻という家父長的な男女関係の認識が薄れ、Gretta を夫の全権力が及ぶ妻などではなく、“So she had had that romance in her life: a man had died for her sake”(223)のように、彼女だけが有する過去や、“He thought of how she who lay beside him had locked in her heart for so many years that image of her lover’s eyes when he had told her that he did not wish to live”(224)のように、秘めた情熱があることに気付く。彼女の過去や感情を受容することが出来た Gabriel は、その時寛容の涙を流し、“He had never felt like that himself towards any woman but he knew that such a feeling must be love”(224)のように、どんな女にも持ったことがなかった愛を感じる。つまり、家父長の所有物や「聖」「俗」という恣意的な認識が投影された存在ではなく、意志を持つ一身体として Gretta を愛することが出来たのである。こうして Gretta は、語ることで Gabriel の家父長的支配と恣意的な認識から解放されたといえるが、こうした、あるがままの人への愛や共感、男女差のみならずあらゆる差の溶解を達成することが可能になる。その様子は、Gretta への本当の愛を悟った後、Gabriel が、死んだ Gretta の恋人や大勢の死者たちとの一体化を感じる次の引用に示されている。

The tears gathered more thickly in his eyes and in the partial darkness he imagined he saw the form of a young man standing under a dripping tree. Other forms were near. His soul had approached that region where dwell the vast hosts of the dead. He was conscious of, but could not apprehend, their wayward and flickering existence. His own identity was fading out into a grey impalpable world: the solid world itself which these dead had one time reared and lived in was dissolving and dwindling. (224-25)

ここでの、死者との融合や過去が築き上げた堅固な世界の溶解に示される、差異の境界線の流動化は、さらにアイルランド全土、宇宙、生者、死者など、あらゆる所に広がり、雪が降り注ぐという現象によって、あらゆる差異の融解が実現されていく様子が示される。Dubliners の最後の場面におけるこの幻

想的な融解には、作品に広がる性差や女性排除の仕組みの融解も含まれていると考えられるが、それは、Gretta の語り“her story”が、“The Dead”の枠をも超越して作品全体に向けて、そこに広がる様々な歴史的背景“history”が生み出す家父長制を解体し、女性に対する「聖」と「俗」という思想体系を一個体の存在へと認識を融合させるからである。そして Gretta の語りは、*Ulysses* 最終話で、秘められた内面を明かす Molly の長いモノローグへと引き継がれる。連続した女の語りは、さらに強い効力を有して、固定化されたものを流動化し、全ての差異をなくしていくことであろう。

註

¹ Mary Daly は、“The biblical and popular image of God as a great patriarch in heaven, rewarding and punishing according to his mysterious and seemingly arbitrary will, has dominated the imagination of millions over thousands of years. The symbol of the Father God, spawned in the human imagination and sustained as plausible by patriarchy, has in turn rendered service to this type of society by making its mechanisms for the oppression of women appear right and fitting. If God in ‘his’ heaven is a father ruling ‘his’ people, then it is in the ‘nature’ of things and according to divine plan and the order of the universe that society be male-dominated” (13) と述べている。

² ケルト神話の女性については、コノハトの女王メーヴやディアドラが代表的だが、彼女たちの気性の激しさや粗野で素朴な強さを伝えているという点では、Myles Dillon, *Early Irish Literature* を参照されたい。

³ Peter Berresford Ellis, *A History of the Irish Working Class, Celtic Women: in Celtic Society and Literature* 等を参照されたい。

⁴ 19世紀から20世紀におけるアイルランドの結婚率について、John A. O’Brien が示すデータによると、人口1,000に対し1801-1901年は4.4%、1901-11年は4.8%、1911-26年は5.0%となっている(25)。

⁵ Harry Stone は、“For instance, embedded in ‘Araby’ is a story, ‘Our Lady of the Hills,’ from a book that Joyce knew well, *The Celtic Twilight* (1893) by William Butler Yeats”と述べた後、“Our Lady of the Hills”の内容を説明し、Mangan の姉のベチコートが見えるこの

場面が、“Our Lady of the Hills”の影響を受けていることを指摘する(306)

⁶ 日本語訳は、枝川昌雄訳による。

参考文献

- Daly, Mary. *Beyond God the Father: Toward a Philosophy of Women's Liberation*. Boston: Beacon, 1985.
- Dillon, Myles. *Early Irish Literature*. Chicago: U of Chicago P, 1948.
- Ellis, Peter Berresford. *A History of the Irish Working Class*. London: Heath, 1985.
- . *Celtic Women: Women in Celtic Society and Literature*. Michigan: Eerdmans, 1996.
- Henke, Suzette A. *James Joyce and the Politics of Desire*. New York: Routledge, 1990.
- Joyce, James. *Dubliners*. 1914. London: Penguin, 2000.
- Kristeva, Julia. *Powers of Horror: An Essay on Abjection*. Trans. Leon S. Roudiez. New York: Columbia UP, 1982. ジュリア・クリステヴァ. 『恐怖の権力: 「アブジェクション」試論』. 枝川昌雄訳. 東京: 法政大学出版局, 1984.
- Litz, A. Walton. “Two Gallants.” Scholes and Litz. 327-38.
- Miller, Jane E. ““O, she’s a nice lady!”: A Rereading of ‘A Mother.’” Scholes and Litz. 348-72.
- O’Brien, John A, ed. *The Vanishing Irish: The Enigma of the Modern World*. New York: McGraw, 1953.
- Scholes, Robert and A. Walton Litz, eds. *Dubliners: Text, Criticism, and Notes*. New York: Penguin, 1996.
- Stone, Harry. “‘Araby’ and the Writings of James Joyce.” Scholes and Litz. 304-26.
- Vries, Ad De. *Dictionary of Symbols and Imagery*. London: North-Holland, 1974.